第33号　令和4年7月

林陽寺報　さくら

ホームページ　林陽寺　検索☜

岐阜市岩田西 3-402　林陽寺　058-243-1380

ご先祖様 年に一度のお里帰り　二泊三日のご訪問　心つくしてのおもてなし

お盆

早いもので、お盆の季節になりました。コロナ禍も終息の兆し、久し振りに家族揃ってのお盆を迎えたいものです。当寺におきましても、感染防止に努め**八月七日のお盆の法要（施食会）に始まり、二十四日の地蔵盆**までいろいろな行事を勤めます。

お盆の始まりについては、「盂蘭盆経」の中の親孝行の大切さを説いた教えが、昔から伝えられています。それは、「お釈迦様の弟子の中で、神通力第一とされている目連尊者が、ある時神通力によって亡き母が餓鬼道に落ち、逆さ吊りにされ苦しんでいると知りました。そこで、どうしたら母親を救えるのか、お釈迦様に相談に行きました。するとお釈迦様は、おまえが多くの人に施しをすれば、母親は救われると言われました。

そこで目連尊者はお釈迦様の教えに従い、夏の修行期間のあける七月十五日に、多くの僧たちに飲食物をささげて供養したのです。すると、その功徳力によって、母親は救われた。」という話です。お盆は故人や先祖に報恩感謝をささげ供養を積む重要な日とされています。

現在、日本各地で行われているお盆の行事は、各地の祖霊信仰の風習が加味されたり、宗派による違いなどありますが、ご先祖や故人の霊が帰って来ると考えられています。

家庭では、家族や親戚が集まり、ご先祖や故人の霊を迎え、感謝供養する行事として行われています。写真は、お盆の時期の林陽寺の様子です。施食棚を出して供養をします。各ご家庭でもお仏壇をお掃除し、お花や供物をお供えして、家族揃ってお参りしましょう。

お盆の時期の施食棚

仏教伝来に思う

美濃出身の奈良時代の僧「栄叡（ようえい）」の功績

「栄叡なくして鑑真日本に渡らず」と言われるほど、「栄叡」の功績は計り知れないものがあり、中国では広東省肇慶市慶雲寺などに記念碑が建立されているほどである。

鑑真和上は、日中文化交流の先覚者であり、単に「仏教の戒律の伝戒師」のみならず、唐招提寺を建立し仏教の礎を築いたと評価され、仏教以外にも建築や絵画、医学、薬学、行政などに通じ、広い分野にわたって唐の文化を日本に伝えた。

栄叡は、七三三年（奈良時代）聖武天皇から伝戒師招聘の命を受け、普照とともに遣唐使船で唐に渡り、唐代随一の名僧鑑真和上に渡日を懇請。和上は渡日することを決意。しかし、栄叡は入唐からあしかけ十七年、彼の地でその生涯を閉じた。鑑真和上は栄叡の懇請に動かされ、五度にわたる船出に失敗し、失明したにもかかわらず渡日されたのは、栄叡と出会ってから十年以上も後のこ

とであった。渡日後和上は、東大寺において聖武天皇（当時は上皇）を始め多くの人に仏戒を授けた。

日本への仏教伝来は五三八年（五五二年説有）百済の聖明王の使いで訪れた使者が欽明天皇に金銅の釈迦如来像や経典、仏具などを献上したことが仏教伝来の始まりとされている。難波津から大和川を船で上り，初瀬川河畔の海柘榴市（つばいち・奈良県桜井市金屋）に上陸し古代の道「山辺の道」を通って都へと向かったのであろう。この河畔に「仏教伝来の地」の碑が建っている。しかし、仏教は、「仏・法・僧の三宝に帰依する」ことを基本としているが、とりあえず仏像（仏）と経典（法）の二つをもって仏教伝来としている。

「仏教伝来の地」の碑

最近読んだ本に「真理の探究」（幻冬舎刊）がある。宗教学者佐々木閑氏と物理学者大栗博司氏の対談を中心に編集された本である。以下のように述べられている。

『「サンガ抜きの大乗仏教」という日本仏教の特殊な形

―さきほどのお話では、日本はサンガなしで「仏」「法」だけになっているとのことでしたが、同じ大乗仏教に支配された中国にはサンガがあったのですね？。

はい、中国のお坊さんは律蔵の重要性を十分理解していました。もちろんそれが厳密に守られないことも多かったのですが、「仏教はサンガがあって初めて成り立つ宗教だ」という認識は常に持っていました。ところが日本に入ってきたときは、サンガという組織が受け入れられなかった。日本の仏教は「サンガ抜きの大乗仏教」というきわめて特殊な形をとることになりました（…中略…）。

そのとき問題になったのが仏教の定義である「仏・法・僧」でした。これを取り入れなければ日本は仏教国ではないことになり、中国と対等な外交関係が築けません（…中略…）。

おっしゃるとおりです。グローバルスタンダードである三宝のうち、「仏」を導入するのは簡単でした。仏像を持ってくればいい。「法」も簡単。お経を書いた巻物を輸入すれば済みます。しかし「僧」はものではなく人間、しかも組織なので、中国からお坊さんたちを集団で船に乗せて連れてこなければなりません。

規定によれば、サンガは四人以上の僧侶がいれば成立しますが、そこには別の問題がもうひとつあります。新たにサンガのメンバーを認可するときは、十人以上のメンバーが承認しなければいけないという規則です。ですから日本人を正式な僧侶にするためには、最初に、十人以上の僧侶を中国から連れてくる必要があります。しかし、これは難しい。沈没する可能性の高い遣唐使船に乗って中国のお坊さんが来てくれるわけがないでしょう。

そのため日本は、「仏」と「法」だけが入って「僧」が入らないというアンバランスな状態が続きました。それでもなんとかして「僧」を入れたいと思っていたところに、ようやくやってきてくださったのが鑑真さんです。鑑真は中国でも有名だったので、十人を超える弟子が一緒に来てくれました。それでやっとサンガをつくり、日本人がそこで次々と僧侶になることができました。ここで初めて、聖徳太子の夢が叶うわけです。日本としては、これで初期の目的が達成されました。日本は、中国と対等の仏教国になるための三宝の導入を完了したのです。』

仏教の信仰は、仏・法・僧の三宝に帰依することに始まりますが、仏弟子としての生き方の基本は「戒」です。

そもそも「戒」とは梵語シーラ（尸羅）の漢訳で、もともとは習慣や性質を意味しています。つまり、良い習慣を身につけること、あるいは良い性質をあらわすこと、と

いった意味が「戒」にはあります。

奈良時代に唐の鑑真大和上が命懸けの来日を果たしてくれたおかげで、日本仏教に初めて「戒」が伝えられました。七五四年東大寺に戒壇が設けられ鑑真和上による授戒が行われて本格的となりました。このとき日本での登壇受戒第一号が聖武天皇です。戒名は「勝満」と授けられました。

日本仏教にも名実ともに仏・法・僧の三宝が誕生したのです。

日本仏教界にとって「鑑真和上」の渡日は極めて意義深く、その陰にあって尽力した「栄叡」は、偉大な功労者であり、岐阜県仏教会のみならず全日本仏教会をも含めた顕彰活動に期待すること大であります。

栄叡大師紹介動画はこちら↑

藍川中の校外学習のお礼（令和三年六月二十八日）

暑くなってきましたが、いかがお過ごしでしょうか。

さて、藍川中学校の総合的な学習「地域調べ学習」の折には、ご多用中にもかかわらず、分かりやすくたくさんお話をしていただきありがとうございました。

林陽寺では、坐禅の体験をしました。坐禅では「調身」「調息」「調心」の三つが大切だと分かりました。私が、坐禅を体験させていただいて驚いたことは頭の中をからっぽにする。いわゆる、何も考えないということに驚きました。私はすぐ何かを考えてしまう人なのですごく難しかったです。

すごく貴重な体験をさせていただいたと思いますので、もし落ちつきがないときなどあったら家でもやりたいと思います。そしてもう一つ驚いたことがあります。それは「だるまさん」と「お釈迦さん」のことです。９年や６年もずっと坐りつづけるのはすごいなと思いました。

今後は、地域のことについて学んだことを生かし地域を愛する気持ちや地域の方へ感謝の気持ちを一層もてるよう、自分から積極的に地域に関わっていきたいと思いました。

１年２組　Ｍ

修行の日々での気づき（第三回）

徒弟　岩水峰雪

（前回の続き）

私は渋々分かったと言って、深呼吸をして落ち着くようにしていたら、状況は緩やかに変わり、その苦痛が消えていったのです。自我が大きいと苦も大きくなるということを知りました。

修行中、九時以降は各衆寮での仕事が始まります。最初は鐘司寮（しょうす）といって、お寺の山内の作務をする新到の役割です。境内の清掃作務、窓拭き作務、障子貼り作務、本堂の荘厳付作務、蜘蛛巣取り作務、ストーブ作務、なんでも作務がつけば仕事になります。一番体力的にきついですが、一番お寺の作務の中では大切な仕事です。最初の頃はこの作務の終わり頃に頂くジュースやアイスの差し入れがなんと有り難かったことか。自分では買ったりできなかったので、本当に有り難くいただいていました。

修行寺には、斎主寮（さいしゅ・

住職のお付から関わること全般）、典座寮（てんぞ・食事全般）、知客寮（しか・受付御朱印全般）、副随寮（ふずい・お葬儀法事全般）、直歳寮（しっすい・伽藍全般）などと一つのお寺を運営していくのにこのように分かれた寮があり、修行僧は約三ヶ月ごとに交代し、それぞれの仕事を覚えていきます。

鐘司から三ヶ月が立った頃、次の配役に私は典座寮の菜頭（さいじゅう）に選ばれました。これには驚きで、大体菜頭になる方は長く修行に当たっている方が選ばれると聞いていたからで、でも、もしできるなら修行中に典座寮に入りたいと思っていた私にとっては朗報でした。典座は僧堂の中でも命を扱う場として特に大事にされる場です。

典座の菜頭の一日は、八時から一時間の間にご飯とお味噌汁約四十人分作ります。九時に各寮とのミーティング、山内の一日の流れと職員さんを含む食事の人数を数えます。そして十一時三十分までに中食を典座老師筆頭に四人で作ります。お昼の後は四時三十分までに薬石を作ります。典座寮では、ある物を余すことなく使ってくれたらなんでも作ってもいいといわれていたので、もともと料理好きな私には天国のような場所で、あれもこれも勿体無いから作りたい！という気持ちになりました。お坊さんの仕事はいわれたことをそのままいわれた通りにすることを求められますが、典座寮はなんでも捨てないように工夫をしたらいいといわれて、菜頭になれて私自身僧堂での日々にバランスがとれるようになっていきました。次回はそんな中でのエピソードを。

お庫裏のつぶやき
プラごみの多いこと

四月一日から、岐阜市のこの地区では毎週水曜日にプラスチックごみの回収が始まりました。始めてみて、改めてプラスチックごみの多さに驚いています。「プラ」の印のついているのを確認して仕分けをしていますが、納豆、豆腐、菓子類等、多くの物がプラスチックの袋や入れ物に入れられています。

私が子どもの頃は、豆腐屋さんがラッパを鳴らして、豆腐を売りにきました。ザルや鍋を持って買いに出たものです。今や売りに来ても、パックに入っていますし、果物も綺麗に包まれて店頭に並べられています。

つい最近、テレビ番組で、辻仁成さん（芥川賞作家）がパリの街の八百屋さんで買い物をする様子を放送していました。そこでは必要なだけの野菜が紙の袋に詰めて渡されていました。対面販売の少なくなった日本では、なかなか見られない光景でした。そんなにプラごみが多いと言うのなら、プラスチックの入れ物に入ってる物を買わないようにすれば良さそうですが、そんな訳にもいきません。市は、この取り組みによって、今までのごみ焼却量を三分の一削減することを目指しています。確かに燃えるごみは小さな袋でこと足りるくらいに減りましたが、プラごみの多さに驚いているのは、私だけではないと思われますが・・・。

※古綿布や古タオル集めにご協力いただいて、有り難うございました。

しだれ桜のもとでマルシェ開催

岐阜市岩田西の八幡山林陽寺で３月２７日、「しだれ桜の縁日」が開催されました。境内にはカレーやオーガニックカフェなど、こだわりの飲食ブースが設けられ、来場者らが長い行列をつくっていました。

また、好天に恵まれた満開のしだれ桜のもと、スティールパンドラムを演奏する岐阜市の「チュラパンスティールバンド」がスティールパンの音を境内に響かせ、来場者らはその明るく陽気な音を楽しんでいました。